

山形県に学ぶ地球温暖化対策

規模拡大、温暖化対策に西南暖地の品種導入か?

高齢化・気温上昇等急激な農業環境の変化にコシヒカリ中心の栽培体系の限界

(参考資料:「地球温暖化に対応した農林水産研究開発ビジョン」山形県農林水産部)

生産者通信

NPO法人
米マーケティングセンター
定価 100円(送料込)

山田錦増産に向け、
独自支援の輪が広がっています

**「山田錦」増産へ10ルアー2500円助成
「枠外」活用好機に**

兵庫県加西市は、酒造好適米「山田錦」の増産支援を行う。市内の全ての「山田錦」が対象で、10ルアーあたり2500円を生産農家に助成する。生産量日本一の北播磨地域を拡大のチャンスと判断し、

兵庫県加西市は、酒造好適米「山田錦」の増産支援を行う。市内の全ての「山田錦」が対象で、10ルアーあたり2500円を生産農家に助成する。生産量日本一の北播磨地域を拡大のチャンスと判断し、

兵庫県加西市は、酒造好適米「山田錦」の増産支援を行う。市内の全ての「山田錦」が対象で、10ルアーあたり2500円を生産農家に助成する。生産量日本一の北播磨地域を拡大のチャンスと判断し、

を上回る320ルアー分を見込んで「山田錦」の一層の増産につなげたい考えは、国が米の直接支払交付金を交付する17年度まで続けることを想定している。

市は4月1日から「加西の酒で乾杯を推進する条例」を施行した。日本酒をはじめとする加西産農産物で造った酒の消費拡大で地域を振興するた

同市では、三木市も「山田錦」の増産支援に乗り出している。同市は、生産数量目標の枠外で増産する分について、市が米の直接支払交付金と同額の10ルアーあたり7500円を独自に交付する。加西市とは交付の対象や助成額が異なるものの、増産を支援する目的は同じだ。

2014年5月4日 日本農業新聞

米生産者の高齢化が昂進する状況で専業農家に圃場が集約しつつあります。しかし、一定規模以上になると適期の収穫が難しく、等級比率が落ちる傾向にあります。加えて、近年の異常気象では変動幅が大きく、高温だけではなく低温による影響も顕著に現れています。

「気候変動に関する政府間パネル(IPCC)の

第4次評価報告書」では、地球温暖化が起こっていると断定されていて、温暖化は現実にも起こっている問題と世界に示されました。

これを受けて、隣の山形県では「地球温暖化に対応した農林水産研究開発ビジョン」を平成22年3月に策定して公表しています。中身は、温暖化の影響を整理しながら対応技術の方向性をまとめたものです。

長期的に見た温暖化は高温による「栽培・飼育環境の不適合」「高温障害」等のマイナスの影響と、寒冷地で栽培できなかつ

た暖地型作物が栽培できないプラスの影響を挙げています。

作物分野別で水稻への影響では、登熟期の高温による収量・品質の低下、低温(冷害)による不稔の発生、長期的には高温による登熟障害の発生、病害虫や雑草の発生様相の変化、有機物の分解促進に伴う地力低下等、様々な影響が発生します。

一方プラスでは温暖化を利用した新たな省力・低コスト栽培方法の開発、二毛作の可能性の拡大などを挙げています。

温暖化に対して、「適応策」「活用策」「防止策」

をそれぞれ「短期的(1~5年)」「中・長期的(6年~)」に整理しています。

活用策の中・長期的では、「高温耐性品種の選定や西南暖地の品種導入等により、温暖化を活用した新たな高品質米の低コスト栽培法を開発」とあります。

ビジョンから既に4年が経過しています。5年目の今年中にビジョンの見直しが発表されるので、分析内容が注目です。

山形県よりも南に位置する新潟県では西南暖地の品種をすでに導入しているもおかしくありません。山田錦栽培適地の最北は、上越地方あたりと、10年ほど

前の酒米資料には解説されています。しかし、山形・福島・宮城でも栽培されているので、確実に北上しています。

規模拡大と温暖化を考慮するならば、山田錦はコシヒカリ収穫の後に刈取り適期を迎えます。

価格の高さからコシヒカリの作付けを拡大しても品質低下を招きます。規模拡大に対応するための設備投資は現状の米価では採算にあいませぬ。それならば、現状の設備を有効活用し収穫期をずらす事で高品質を望める西南暖地品種の導入は生き残り策の一つでしょう。